

平成30年6月6日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02142

研究課題名(和文)15-16世紀のフェッラーラにおける美術活動に関する調査研究

研究課題名(英文)Study on the Ferrarese art during the 15-16th century

研究代表者

京谷 啓徳 (KYOTANI, YOSHINORI)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：70322063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ルネサンス期にエステ家の支配したフェッラーラにおける美術活動に関して、君主の世代間、複数の画家間、ジャンル間等、多様な関係性という新たな観点からの総合的理解を目指した。とりわけ複数の君主の治世にわたって制作が継続された美術プロジェクト、複数の世代の画家たちによって受け継がれた要素、大壁画と板絵や写本彩飾画との相互的な関連、祝祭・演劇と美術活動の関連といった、様々な関係性の網目から、エステ宮廷の美術の特徴を新たに抽出した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to reconsider the Ferrarese art during the 15-16th century analyzing, in especially, (1) art projects continued through the reigns of Este rulers, (2) elements inherited by several generations of painter, (3) reciprocal influence between fresco painting and miniature (manuscript painting), (4) relation between courtly art and ephemeral construction, tableau vivant in courtly festival.

研究分野：西洋美術史

キーワード：フェッラーラ エステ家 君主 宮廷美術 書齋 祭壇画 祝祭

1. 研究開始当初の背景

15世紀から16世紀にかけてエステ家治下において繁栄をみた、北イタリアの宮廷都市フェッラーラの美術に関しては、20世紀初頭のR. ロンギによる基礎的な様式研究以来、多くの学問的貢献がなされてきた。フェッラーラ派の主要画家たち(コスメ・トゥーラ、フランチェスコ・デル・コッサ、エルコレ・デ・ロベルティ、ドッソ・ドッシら)に関しては、複数のモノグラフ研究が著わされるとともに、フェッラーラ派美術の金字塔たるスキファノイア宮殿「12カ月の間」の装飾壁画(1469-71年)に関しても、多くの研究が捧げられている。

報告者も従来、15世紀を中心にフェッラーラ派の美術の研究に携わってきたが、特にボルソ・デステ(在位1450-1471年)の時代を取り上げ、彼が注文主であったスキファノイア宮殿の「12カ月の間」装飾壁画および「ボルソ・デステの聖書」の写本彩飾画に関して、それらの作品がいかにして君主称場の場として機能しているかを跡付けてきた(『ボルソ・デステとスキファノイア壁画』(中央公論美術出版、2003年)、『エステンセ図書館蔵本ファクシミリ版ボルソ・デステの聖書日本版解説1/2』(岩波書店、2001/2002年)など)。

2. 研究の目的

上記のような従来の研究に対して、本研究は、様式研究ないし個々の作品の図像学的研究ではなく、15-16世紀という時間的な幅をもったフェッラーラ派の制作活動に関して、君主の意を受けた宮廷美術として同派の活動を成立させていた、様々な関係性の網目からの再検討を試みるものである。宮廷美術の成立要件は、注文主である君主、実際に作品を制作する宮廷画家、作品の図像プログラムに関して助言をなす宮廷学者、作品の観者となる宮廷人たち、作品が描かれる、ないしは設置される場所(宮殿であれば広間、寝室、書斎等)と様々であり、宮廷美術はこれら宮廷環境ならではの様々な要件の間の、複雑な関係性の力学によって生み出されるものである。また、君主の趣味嗜好や宮廷人の教養を期待した制作といった点から、その宮廷ないし君主の個性が濃厚に刻印されるものでもある。よって、宮廷美術を深く理解するためには、それらの要件の間の多様な関係性を考慮に入れつつ、制作された作品を検討することが有効であると考えられる。

以上のように、宮廷美術における様々な関連性にスポット・ライトを当てる本研究は、

フェッラーラ宮廷における美術活動の理解に関して新たな視点を提供するものであり、同時にそれは、同時期の他宮廷、すなわちマントヴァのゴンザーガ家、ミラノのヴィスコンティおよびスフォルツァ家、ウルビーノのモンテフェルトロ家と美術の関係にも敷衍して検討することが可能であることから、イタリア宮廷美術研究の発展に益するものであるといえる。

3. 研究の方法

本研究では、15-16世紀のフェッラーラ派の美術に関して、君主の世代間、複数の画家間、ジャンル間等、多様な関係性という新たな観点からの総合的理解を目的とし、具体的には、複数の君主の治世にわたって制作が継続された美術プロジェクト、複数の世代の画家たちによって受け継がれた要素、大壁画と板絵や写本彩飾画との相互的な関連、フェッラーラ宮廷を特徴づける祝祭・演劇と美術活動の関連といった、様々な関係性の網目から、エステ宮廷の美術の特徴を新たに抽出する。

まず、フェッラーラ派という一つの流派において、画家たちの世代交代が進む過程で何が変わり、何が変わらなかったのかを検討することは、フェッラーラの宮廷美術について理解する上では欠くことのできない視点である。本研究では、ベルフィオーレ宮殿のストゥディオーロ(書斎)のムーサイ連作において、注文主がレオネッロ・デステからボルソ・デステに変わったことに伴い、連作の性格が変化していった様子を跡付ける。ついで、建築的に複雑に構築された玉座という、フェッラーラ派ならではの独自性をもつ一連の祭壇画について、悉皆的に作例を集めたうえで、各世代の画家たちがどのような形で、このフェッラーラ派の伝統を受け継いでいったのか、またそれは注文主側の意向とどのような関連にあったのか等について分析を進める。さらに、16世紀フェッラーラを代表する画家であるドッソ・ドッシが15世紀のフェッラーラ派画家とどのような関係性を取り結んだかを、代表的な作例である《魔女キルケー》を中心に明らかにする。このように様々な視点・事例において、フェッラーラ派における世代間の関係を精査していく。

またフェッラーラ派絵画における大壁画と写本挿絵などの関係についての検討、フェッラーラ宮廷における祝祭・演劇の実態、およびそれと美術制作の関連について明らかにする作業もおこなう。

4. 研究成果

(1) ベルフィオーレ宮殿のストゥディオーロの装飾板絵連作に関する調査研究

君主が代替わりした際のプロジェクトの継続、変更について調査することからは、宮廷画家が君主の要望に臨機応変に寄り添う様子が観察できる。そのような観点において、格好の研究対象となるのが、ベルフィオーレ宮殿のストゥディオーロ（書斎）のムーサたちを描いた装飾板絵連作である。この連作は、まずレオネッロ・デステ（在位 1441-1450 年）によって発注されたが、その死後にあとを継いだ弟ボルソ・デステによってプロジェクトが引き継がれた。当初の注文主であったレオネッロ・デステの時代の図像プログラムに関しては、レオネッロに図像についての示唆を与えた宮廷学者グアリーノ・ダ・ヴェローナの書簡が存在することより、M. バクサンドールらによって研究がなされているが、ボルソの代になってからの変化については、従来ほとんど論じられていない。よって本研究において、君主交代が本板絵連作に与えた変化を詳らかにすることは、宮廷美術における君主・学者・画家間の力学を理解するうえで意義深い。個々のムーサ図像に関しては、S. キャンベルや J. マンカが、連作のうちコスメ・トゥーラが担当した作品に関してのみ分析をおこなっているが、同様の作業を各地に所蔵される、その他のムーサたちを描く板絵に関してもおこなった（フェッラーラ国立絵画館、ミラノのポルディ・ペッツォーリ美術館、ベルリン国立美術館、ブダペスト国立絵画館等での調査）。トゥーラの手掛けた《カリオペ》が、マルスやウルカヌス、あるいはイルカを模した装飾の追加によって《ヴィーナス》に変更されたことをはじめ、複数のムーサにおいて変更が行われていること、またボルソ・デステのインプレザ（個人的な紋章）も付加されていること等が明らかとなった。なお、本研究においては、板絵が設置される場所が書斎であったことも重要であるが、これに関しては、W. リーベンヴァインの研究を参照した。

(2) 15-16 世紀のフェッラーラにおける複雑な建築的構造を有する玉座の描かれた祭壇画の系譜に関する研究

一つの流派の中で世代交代の際に受け継がれるものと、そうでないものがあるが、フェッラーラ派の歴史の中で変わらなかったものに着眼するのがこの研究である。フェッラーラ派の特徴的な要素の中で、最も継続的

に採用され続けたのは祭壇画における玉座の構造、およびそれによる空間の構築方法である。高い基壇に乗る、建築的に非常に複雑な形をした玉座の描かれた祭壇画は、15 世紀のコスメ・トゥーラのロヴェレツァ祭壇画（ロンドン、ナショナル・ギャラリー）を嚆矢として、同じくコスメ・トゥーラのサン・ラッザーロ祭壇画（ベルリン、カイザー・フリードリッヒ美術館旧蔵、第二次世界大戦にて焼失）、エルコレ・デ・ロベルティのポルトゥエンセ祭壇画（ミラノ、プレラ絵画館）を代表作例とする。そしてその後、16 世紀に入っても、ロレンツォ・コスタやフランチャラによって継承されていく。多くの画像資料を収集することにより、その継承の実態を正確に跡付けるとともに、そのことの持つ意味について考察した。祭壇画の場合、注文主は必ずしもエステ家とは限らないが、同家が教会や修道院と関わりを持つ事例も含まれるため、注文の経緯等に関しても、資料を精査した。

(3) 16 世紀のエステ家宮廷画家ドッソ・ドッシと 15 世紀フェッラーラ派絵画との関係に関する研究

従来のフェッラーラ派研究の問題点の一つとして、15 世紀のフェッラーラ派と 16 世紀のフェッラーラ派が、それぞれの時代の研究者により別個に研究されてきたということが挙げられる。たしかに、フェッラーラ派を様式という観点から見れば、16 世紀フェッラーラを代表する画家ドッソ・ドッシらにあっては、同時代のヴェネツィア派等の影響を強く受け、従来のフェッラーラ派の独自性が失われたということが確認される。しかし、ドッソ・ドッシという画家には、実はいままでも断片的に言及されてきた以上に、15 世紀のフェッラーラの作品を意識した制作をおこなっていた。ドッソ・ドッシがあくまでもエステ家の宮廷画家であり、雇用者の存在を前提とした制作をせざるをえなかったということも、そのことに大きく関連していることが考えられる。

このような観点から、16 世紀を代表する画家であるドッソ・ドッシが、15 世紀フェッラーラ派の遺産とどのような関係を取り結んでいたかを、具体的な作品分析に基づきながら検討した。ドッソに関しては F. ギボンズ、A. バラリン、G. フィオレンツァ等のモノグラフ研究があるが、ドッソと 15 世紀フェッラーラ派の関係は G. フィオレンツァが先鞭をつけた課題であり、その示唆を受けつつ、研究を発展させた。特に、ドッソの代表作の一つ《魔女キルケー》（ローマ、ボルゲーゼ

美術館)とベルフィオーレ宮殿のムーサイ連作との類似は、そのいずれもが、制作過程において描き直しを経験しているという点からも興味深いものである。ドッソの魔女図も 스튜디오オーロのムーサ図も、いずれも着飾った女性を画面中央に大きく描き、周囲のモチーフによって主人公のアイデンティティが揺らめくという特徴を持っている。ベルフィオーレ宮殿のムーサイ連作は君主の 스튜디오オーロのために制作され、宮廷画家であったドッソが見知っていたことは疑いない。ドッソは同じエステ君主からの注文による魔女図を描く際に、過去のエステ家君主のために作られた、同様の趣向を有するムーサ像を参照していたと考えられ、またそのような趣向はエステ家君主や宮廷人たちに喜ばれるものであったことが推測されるのである。

(4) スキファノイア宮殿「12カ月の間」装飾壁画と板絵、写本装飾画の相互関係に関する研究

報告者がこれまで研究してきたフェッラーラ派最大のモニュメンタルな作品であるスキファノイア宮殿「12カ月の間」装飾壁画と、同時代の板絵や写本彩飾画の関連を調査した。スキファノイア宮殿壁画に関する研究としては、R.ヴァレーゼやS.セッティスがそれぞれ編んだ大部の研究書があり、報告者もその図像プログラムに関して、博士論文を執筆・出版したが、本研究ではそれらで扱われていない、本壁画とフェッラーラ派の板絵や写本彩飾画といった他ジャンルの作品の関係性の究明をおこなった。フェッラーラでは、宮殿の大広間を飾る壁画、書斎を飾る板絵、宮廷人たちが礼拝に用いる聖書や時禱書の挿絵装飾のたぐいと、さまざまなジャンルの美術品が制作された。それは同じ注文主により、同じ宮廷環境で用いられたものであることから、君主の個性を反映しつつ、相互にさまざまなレベルでの関係を有したことが推測されるのである。

モチーフ、構図等の相互的な引用関係の事例を集めるために、各地の図書館等に所蔵されるフェッラーラ派写本の調査をおこない、その結果、スキファノイア壁画の図像と関連性のある写本装飾画や版画を見出すことができた。例えば、パリ国立図書館に所蔵される「Rationale divinatorum officiorum」写本(cod. Lat. 723)の第一葉表の挿絵がスキファノイア壁画3月下段の建築物や背後の風景をそのまま引用しているものであること等である。それらの事例のフェッラーラ派の文脈における意義についても検討した。

(5) フェッラーラ宮廷における祝祭・演劇と美術の関係に関する研究

フェッラーラのエステ宮廷はイタリア諸宮廷においていち早く古代演劇の復活上演を行った宮廷であり、15世紀の宮廷学者ペレグリーノ・プリチャーニの「De Spectacula」のような劇場論も執筆された。エルコレ・デ・ロベルディ作品における舞台美術との関係を扱ったJ.マンカの先駆的な研究を参照しつつ、フェッラーラにおける演劇実践の状況がどのような形で美術作品と相互関係を作りだしたのかについて、フェッラーラのルネサンス研究所やアリオステア図書館の所蔵する一次資料を用いながら分析した。とりわけスキファノイア宮殿壁画の背景に描かれた都市表現と舞台背景画の関係に注目した。

また、ルネサンス期の他都市と同様、フェッラーラにおいても宮廷祝祭に活人画的趣向が用いられることがあった。特にボルソ・デステのレジヨ入市式における事例が著名であるが、それとスキファノイア宮殿壁画に描かれた神々の凱行列列のような絵画作例との関係性を探った。このようなルネサンス期の宮廷祝祭と現実の絵画の間の往還については、『凱旋門と活人画の風俗史 儂きスペクタクルの力』において詳述した。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

京谷啓徳「ゴンザーガ家と聖血の聖遺物」
『哲学年報』76(2017)、33-54

〔図書〕(計2件)

京谷啓徳『凱旋門と活人画の風俗史 儂きスペクタクルの力』講談社選書メチエ、2017(単著)

小佐野重利・京谷啓徳・水野千依『西洋美術の歴史4 ルネサンスI』中央公論新社、2016(共著)

〔学会発表〕(計1件)

木下直之・京谷啓徳「仮設の文化 - モニュメンタルなものとのエフェメラルなものとのめぐる対話」静岡県文化プログラム(ナナラボ) 2018年2月

〔その他〕(計1件)

京谷啓徳「ルネサンス宮廷都市と芸術家
たち」『地中海学会月報』377(2015)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

京谷 啓徳 (KYOTANI YOSHINORI)
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：70322063